■私の意見

「望まれる参画と合意形成の新システム」

村井　顕彦
（AM神戸・ラジオ関西社長）

そぼ降る秋雨の中二十五万人が詰めかけたタイガースの祝勝パレードは、長びくデフレ不況と震災の後遺症に喘ぐ神戸の街が久方ぶりに沸き返ったひとときでした。巷間、六千億とも七千億とも言われるリーグ優勝の経済効果。たかが野球されど野球であります。

ところで昨今、どうもこの街に元気がありません。あの大震災直後の爆発的なエネルギーが何処かに消えてしまったようです。原因は色々あるでしょうが、私はこの地域の風土が幾分作用しているような気がします。温暖で恵まれた環境は進取の気風と自由闊達な市民性を育んできましたが、一方で熱しやすく冷めやすい、郷土意識が希薄で結束力に欠ける性分を生んでこなかったでしょうか。政治、経済の分野では英雄、スーパースターを輩出しない。芸術文化の世界でも人間国宝が出ない。あらゆる指標で全国ランキングに登場するもののダントツがないなどが挙げられます。

しかし幸いにして神戸や阪神間の都市イメージ、神戸ブランドの高い評価は健在です。今、この街に求められているのは明確な〝顔〟づくりではないでしょうか。ましてや都市間の競争から融合をはかるネットワークとコラボレーションの時代。多様化は結構なことですが軸足が定まらなければパワーにはなりません。

都市の将来を見据えたグランドデザインとそれを策定する産、官、学、民の合意形成システム、総合プロデュース機能、効率的な役割分担、それに規制緩和と新しい枠組みづくりが不可欠だと思います。

間もなく震災メモリアルの神戸ルミナリエが始まります。今年で九回を数え師走の風物詩として定着しましたが、その舞台裏は決して順風満帆ではなかったようです。いずれにせよ二週間で五百万人の動員力は、流石のタイガースも真っ青といったところです。開催の継続には賛否両論あるところでしょうが、身近かで具体的なプロジェクトについての合意形成の試金石として位置づけられることを期待したいものです。

私は常々メディアはムードメーカーであるべきだと考えています。多彩な価値観の交差点であり、転轍機の役割りを果たしたいと願っています。これからも地域と共に、そして癒しと元気を発信し続ける放送局を目指して…。

■ポエム・ド・コウベ

交響

詩・画　岩崎　風子

うなる電線
窓をたたきつける雪あらし
ストーブの上で　滾る湯

つのるばかりの
何か　とりかえしのつかぬ思い
心の渇く夜

永い夜の
ながい夜行の汽笛が
吹雪に散りぢりにとんでいった

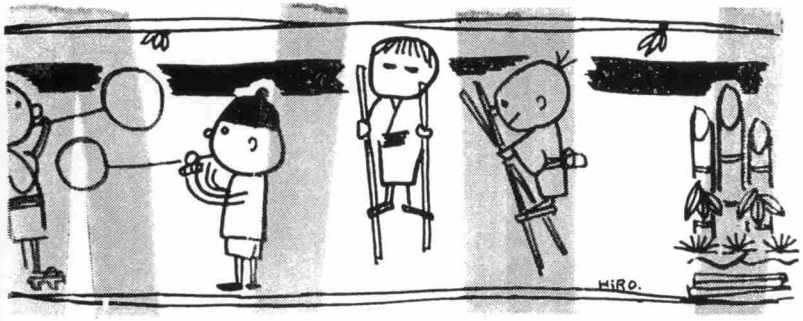
どこから来たか
奔走してきてはふと
立ち停(じま)るきつね

その青いサーチライトの目
問いも
迷いもなく
ふかい　やさしい傷口のように
ほんのひと時
こちらへ向けられる光
銀の闇から
しん　と
まっすぐに　とどいてくるもの

神戸のこと 手当り次第

淀川長治
え・松本宏

一九六三年一月号掲載

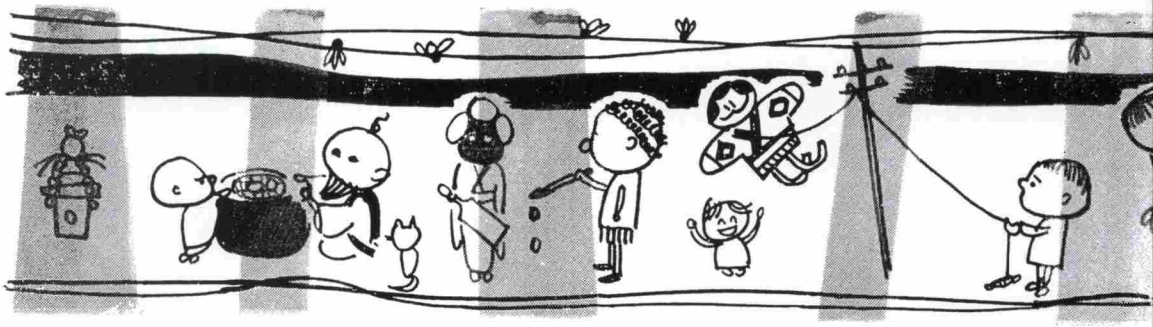


このごろは正月を迎えても、昨日の月曜日が今日は火曜日か……みたいなわけで、すこしも正月らしくない。一日じゅうテレビにかじりついているか、出しおくれた年賀状を書き足しているかで、どうも味（あじ）もそっけもない。

しかしお可笑なもので、正月となると、いくつ年をとっても妙に少年時代の「お正月」というものが懐しくよみがえって、いかにも正月が楽しかったあの可愛いらしさに思い出し笑いというようなものが出てしまう。

×　×

神戸のお正月は、あの頃は、ポッペンとパチパチから始まった。ポッペンというのは細いガラスのくだの先きにシャボン玉のような丸いガラスの玉がついていて、その玉に絵の具で花の絵（ぼたん）などが派手に描かれていて、その細いガラスくだを口にしていきを吸ったり、または吹いたりすると、そのガラスのうすい玉がペコン



ペコンと面白い音をたてる。このポッペンは小は手の中にはいるような小さなガラス玉から大は子供のあたまより大きなのがあって、これはいきを吸ったりはいたりするとペコンペコンとはいわないでボベンボベンと太く大きな音を立てる。

これは今でも神戸のお正月にはあるのであろうか。ほんとうに懐しい。そのガラスのくだの先きの玉は巧いぐあいにその玉の先たんが平らぺったくなっているので机の上にでも、または床の間の上にでもガラスのくだを上に玉を下に立てて置くことが出来る。

私の少年時代にはまだ人力車が走っていて、お正月というと長田神社や生田さんにこの人力車で芸者衆が正月の紋つき姿でお詣りに行く。そしてその帰りに、きれいな日本髪にビラビラの正月用の髪飾りをつけた芸者が、その頭から顔にかけて、うすいうすい紫色か白色のベールをふんわりとかぶり、人力車にちょっと斜めに乗ってその芸者がみんな云い合わせたように、あのポッペンの一番大きなのを羽子板のように胸から肩のあたりにもたせかけて持っている…それがいかにも正月らしくてまだほんの子供であった私ながら「ああ、きれいなァ」と見とれたものである。

パチパチのほうは……もうこれは盛んに愛用いたしまして、大きいのはドンパンと称して赤い紙で巻いた竹つつくらいの大きさの丸い円筒、これにダイナマイトのしんみたいなのが出ており線香の火をこれにつけ、しばし見はからってこれを道路に投げると……ドーンパチーン。その音の気持ちのよいこと！

パチパチのほうはこれは神戸が外国船客の出入り口というので中国のしきたりがそのまま移ったのであろうが、小さなトウガラシのような赤いのを何十個もつないだ糸を家ののきに吊るして下から火をつけるとパチパチパチンとかん高い音を気持ちよくひびかせて下から上にはじけて行く。これを一個一個手にもって線香の火をつけては道に投げる。きれいな女の子が正月の晴着で通るのを目がけてパチーン。女の子は「いややしィー」と怒って逃げる。これがまた面白いとは悪い子でありました。ドンパンもポッペンも実はみんなこれは中国のお正月の香りがする。みんなあちらからの輸入がもと

なのであろう。それだけにまた、いかにも神戸のお正月の香りが出た。

×　　×

そのつぎは云わずもがなの……新開地である。お正月の新開地はのきなみに「ニコニコ大会」と称するアメリカの短編喜劇大会。チャップリンにロイドにキートンにロスコー・アーバックルのデブ君。こんな人たちの賑やかな絵看板が、キネマ倶楽部から錦座から朝日館にかけてずらりと競いならんで、その看板の両わきには、ささの葉も美しいその枝に大判小判を吊るしてそれが風にゆれるとキラキラ光る。さらに枝のさきにはもち玉の白とピンクが可愛いくすずなりに飾られて、その看板も見たいし一刻も早く活動写真が見たいしで、私は紺がすりに、おろしたての下駄、その下駄に新しい足袋の先きを下駄をコンコンと足のさきで叩きつけて足の先きがうまいぐあいにはなをにはいるようにする。ふところにはあちこちで頂いた正月の小使い銭がいっぱい。さあこれから活動を見に行くんやぞオ……その楽しさは、何にたとえん……という嬉しさだった。

「えー、パンにキャラメル、おかきに八つ橋、するめにラムネ」人に押されもみくちゃのなかから「おばはーん、ラムネー」と手をのばし体をもち上げる。ニコニコ大会の映画の場面はどこの館に行っても三分の二しか見えない。あとの三分の一は人の頭で見えないのは常識。

こんなもみくちゃの中で笑って笑ってラムネを飲んでパンをかじって、さあ、こんどは錦座や、まだ今なら朝日館のも見られる……というわけで見てはとび出し、駈けこんでは、また次ぎの映画館にもぐりこむ。見ているさいちゅうに「わっ、プログラムどこいったあれへん、落してもた」と映画ファン気どりの私は大事な大事なプログラムがなくなってさがしまわると、それが汗びっしょりの自分の胸の中のシャツの中の腹のへその上にぺったりくっついていたりして「なんや、もう、わややがな」というわけで、ああ神戸の少年時代のお正月は懐しい！

（映画評論家）

男と女と男と女と男と女と

☆〈特集〉旧居留地界隈まちづくり座談会

旧居留地東の新しい魅力を語る

長澤　昭　株式会社エス・エフ・エー・ジャパン　代表取締役社長
シャーリン・ダイヤ　ダイヤ108　プロデューサー
高野多美　ファッションコーディネーター
小森章太　株式会社ポトマック　取締役飲食事業部　部長
領家嗣公　株式会社村上工務店　営業本部長
山下太郎　総合地所株式会社　プロジェクトリーダー
上ノ山治　三井不動産販売株式会社　関西支店住宅営業グループ　課長代理

住居スペースと商業スペースの融合

昭和15年頃の居留地（模型）

長澤　90年代に、旧居留地に人が集まりはじめたいちばんの要因は、なによりも家賃が安かったことにあります。当時は、来てほしい企業にお願いに行っても、誰もノーとは言いませんでした。海外ブランドが多かったのですが、交渉に行くと必ずオーナーが出てくるのです。まちにショップをつくるとなると、ちゃんと自分の目で確かめるのです。まちづりというのは、出店者がどれだけの思いを持つかにかかっていると思います。我々の努力も必要ですが、オーナーの理解も必要ですね。商業者とディベロッパーというのは、利益が相反しますが、いい建物、いいまちにするという意味では、一致していると思うのです。

高野　私もこの居留地が大好きなのですよ。学校関係の方々も、ここは本当に落ち着きのある大人のまちだと、口を揃えて仰います。新しい建物でも、どこかに懐かしさがありますよね。大丸も朝日新聞社ビルもそうですよね。ものすごく地域を愛している方々が、このまちをつくっているのだなあと感じるのです。散策できるまちであり、生活空間があるまちですよね。日本の場合、商業スペースにはそればかり集中してしまい、住空間はまったく別の場所ということが多いのですが、居留地に関しては、住み心地のいい商業スペースです。だからこそゆっくりとした歩幅になると思うのです。

長澤　先日南さんのビルに入ったのですが、本当にびっくりしましたね。最高級のホテルかと思いました。素晴らしいの一言です。さすがに居留地を愛している人だと思いましたね。居留地に建てるなら安っぽい建物は駄目なのですよ。住居などは特に最高のものをつくってほしい。あと住む人がいなければ、まちは無機質なものになってしまいます。商業施設、ホテルばかりでは面白くない。まちには人間の匂いがしなければならないのです。まちを愛するのは、まずそこで生活する人ですから。

シャーリン・ダイヤさん

上ノ山治さん

山下太郎さん

小森章太さん

高野多美さん

領家嗣公さん

長澤昭さん

シャーリン　私が住んでいた家は、半世紀（約40年）に渡って、もともとダイヤ氏の経営する（株）鹿島工業の事務所でした。その鹿島工業が、別会社のアメリポートと合併することになり「旧朝日ビルディング1F」に移転することになったのです。それに伴いその場所を住居として利用することになったのです。それが30年前のことです。プライバシーのこともあってひっそり暮らしていたのですよ（笑）。その後、私自身ずっと旧居留地で暮らし、この街の変化を見つめてきたのです。

そうした中で、ダイヤ邸の建つ旧居留地という土地とダイヤ108の構想に魅力を感じ、賛同してくれるテナントとの出逢いがありました。そして私は、旧居留地東側の活性化の為という想いも込めてダイヤ108をファッションビルとして建築する計画を決心したのです。

長澤　個人の価値観として、森のような場所でひっそりと暮らすのはいいことだと思うのです。ただまち全体の価値観としては、シャーリーンさんの家はまちの顔にもなるところですから、まちの美意識に同化していただきたかったのです。あそこに素晴らしい個性のあるショップがあるだけで、まちのプラスになると思います。今回のご決断は正しいと信じています。

小森　私のところがいちばんにテナントで入ることを決めたのには、まずはあの近くでHASUというお店をやっていたことがあります。そして一昨年にはシャーリーンさんの家の前で、和食の店をオープンさせていただきました。居留地という場所では、また違う形を提案していきたいのです。今回は、もともとアウェストにあったブラッセリーをそのまま形を変えてリニューアルさせていただきます。ブラッスリー・トゥーストゥースという形でオープンします。

村上　このビルを受注するまでには非常に苦しみました。神戸の真ん中である旧居留地で仕事をできると言うことは、私たちにとっての望みであり、またチャンスに恵まれなければできないことでもあります。そのなかで普通のビルではなく、エコロジカルなビルを建てるということでした。恥ずかしながら、そういうビルを建てたことがなく、ほとんど耳にしたこともなかったのです。「どういうものをつくればいいのだろう?」ということで、いろいろと調べたのですが、そのプロセスのなかでようやく方向性が見えてきたのです。外壁にも藁や麻などを入れ、色合いも自然に近いものになりました。当初、シャーリンさんから聞いて

非常にむずかしいことでした。しかしできる限りそれに近いものをつくりたいと思い、毎週火曜日に定例打ち合わせ会を、合計22回開きました。後戻りはできませんでしたから、徹底的にやろうと思ったのです。その代わり、変更の繰り返しでしたね（笑）。現場は本当に大変でしたよ。つくりかけたものに対する変更は大変なことでしたね。手前味噌ですが、本当にいいものになると思います。まだ作業は残っているのですが、最後まで無事故でがんばりたいですね。

シャーリン　神戸の工務店さんにお願いできて本当に良かったと思います。

村上　お金の問題とか言いますが、最後に出てくるのは知恵です。その知恵は、まち対する愛情から出てくるのだと思います。打ち合わせを重ねるたびに、まちへの情が湧いてくるのですよ。

歩きたくなるまち 住んでみたいまち

山下　僕は大阪の下町に住んでいるのですが、子供の頃は毎週神戸に連れてきてもらっていたので、本当に神戸が好きだったのです。地震などの影響で若干足は遠のいていたのですが、今回最高の土地があるということで、まず見に来たのです。自分が住みたいと思えなければ、お客さんにお勧めできないのですよ。単純に僕が住みたいと思いましたね。

上ノ山　これまで旧居留地を、住宅の観点から見たことがなかったのですよ。お客さんもそういう反応をしてくれるのか、正直不安を抱えながらスタートした部分もありました。実際に蓋を開けてみると、マンションの設備などより、このまちに住みたいというお客さんが多かったのです。いま全国的に都市型マンションが流行りですが、そのなかでも利便性プラスの価値観がここにはあります。このまちで生活することへのこだわりを持った方々に、非常に高い評価を持って受け入れられているように思います。我々の予想以上にニーズがあったと思っています。

長澤　なによりも格好いいまちに住みたいのですよ。いまレストランに行くといえば、ほとんど車で動きますが、お酒を飲めないのですよ。飲めないなら、ご飯を食べても美味しくないのですよ（笑）。

長澤　もともと居留地というのは、全体で計画化されたまちだったのです。1番から百何十番まで整理されたまちです。ですからまち全体のどこからでも発展する可能性のあるまちだと思っているのです。たまたま大丸周辺から発展していきましたが、その可能性はどこにもあります。居留地に番号がついているということは、それだけで値打ちがありますから。

シャーリン　ルミナリエまでにオープンが間に合えばいうことないですね。事務所などは来年に入ってから引っ越しする予定です。

小森　他のお店もそうですが、ルミナリエを弾みに考えていると思うのです。ルミナリエを見ながらクリスマスを過ごしてほしいと思っています。

長澤　ルミナリエは素晴らしいと思いますよ。売上げそのものよりも、最大の広告ができるわけですから。

　人の集まるところに真実があるという言葉があります。人が集まるところにはなにか意味があるものです。まちづくりというものは、

のです。まちづくりというものは、いろいろむずかしい面があって、僕らは偶然に1982年に居留地に1号店をつくったのですが、たまたま幸運に恵まれたのです。その頃は、誰も居留地というまちを評価していなかったので、家賃がものすごく安かったのです。商業的な観点から言うと、はじめはマルイさんの出店には危機感を感じていたのです。できてみれば違う価値観の場所なので、そういう心配はありませんでした。今後の居留地にはホテルより住宅が必要ですよ。

ダイヤ108

ルネ神戸 旧居留地109番館

高野 東京にはホテル機能を持ったマンションがありますよね。関西にはあまりありませんね。

長澤 そういったものが居留地にあれば、レストランもあるし、交通も便利、朝などは散歩しても気持ちいいではないですか。素晴らしい環境ですよ。そういう意味で居留地が発展していけば、面白いと思いますよ。

山下 まちの魅力というものがある場所ですね。お客様からも「歩きたくなるまちですね」と声をかけていただけます。実際に歩いていただければ、まちのこともよくわかってもらえます。神戸の地元の方はもとより、仕事などで神戸にご縁のある方が、住んでみたいと言っていただけます。非常に広いエリアから来られていますね。

村上 これまで住宅と言えば、交通の便、大きさ、内装などのハード面が選択条件でしたよね。これからはまちの良さが、重要になってくると思いますよ。

高野 居留地は住む人と、ショッピングゾーンが融合したいいまちになりつつありますよね。ニューヨークでもパリでも、近所に住んでいる人が、休日に1日中公園で過ごす光景をよく目にします。居留地にも東遊園地という公園がありますよね。居留地でもそういう光景が見られたらいいなと思うのです。それと神戸というところは、日本でもとても特殊な地域だと思うのです。本当に住む人のためのまちができるような気がします。

長澤 僕は居留地にそれほど「理想的なまち」というイメージはないのです。ただいいショップ、レストランがあるまちであってほしいのです。ショッピングするということは楽しさなのです。もっとショップにも集まってほしい。住んでいる人が、感性のいい生活ができることが最高だと思うのです。

シャーリン 今は夜も早いですし寂しいですよね。できれば旧居留地内で楽しめる場所がもっと増えてほしいですね。来年にはマンションもできますし、もっと変わってくると思います。私は30年間このまちを見てきましたが、今は旧居留地にとって本当に大きな変化の時期だと思います。特に京橋筋の東側は、これから楽しみだと思っています。

■特　集　〈対談〉

第7回ＪＡＣＴ大会２００３神戸　日本代替・相補・伝統医療連合会議によせて

「さわやかな人生を送るために！」医療産業都市構想とＪＡＣＴの融合を

岡田昌義　兵庫大学教授　医学博士

藤田　稔　株式会社フットテクノ　代表取締役社長

平成15年12月20日(土)と21日(日)午前9時から、神戸国際会議場において「第7回ＪＡＣＴ大会２００３神戸」が開かれる。

ＪＡＣＴは、日本代替・相補・伝統医療連合会議の略。先端医療に対して、その代替と相補という、温泉療法や、芳香療法、健康食品、伝統医療によって、癒しの医療でバランスをとる学問。神戸で初めての全国大会を前に大会会長岡田昌義氏と藤田　稔氏に対談をお願いした。

岡田昌義
兵庫大学健康科学部教授　兵庫大学健康管理センター所長
現在の神戸大学医学部を昭和36年に卒業し、同大学大学院博士課程(外科学)専攻修了。医学博士。
ドイツのハイデルベルク大学外科学教室に国費留学。とくに、心臓血管外科学を研鑽。神戸大学医学部教授(外科学第２講座)を歴任。ハーバード大学、ハイデルベルク大学、ベルリン自由大学などの客員教授
教授を定年で退官するまで、心臓血管外科領域において実施した世界の歴史に残る数々の業績は高く評価されている。
専門分野：心臓血管外科、胸部外科、レーザーと医学、補助循環など

藤田　稔
株式会社フットテクノ代表取締役社長
1966年　渡英、ノーサンプトン大学・SATRA(靴総合研究協会)にて足と靴の研究を行う。
1984年　高性能シューズ新素材開発に成功。米国デュポン社と取り組むスポーツメーカー「ナイキ」と素材提携
1987年　足と脳の活性化と健康を目的に株式会社フットテクノを設立　神経叢に作用する新しい香りの開発に成功
1990年　産業医科大学医学部菅野教室にて香りの研究・検証に着手
2000年　国際ストレス学会(米国)にて発表
2001年　国際スポーツ心理学会(ギリシャ)にて発表

西洋医学一辺倒から原点の東洋医学へ

岡田　この度、第7回ＪＡＣＴ大会が12月20日㈯～21日㈰に神戸国際会議場で開催されます。神戸ルミナリエ開催期間中でもあり、一般の方にも来ていただける内容になっています。私は専門が心臓外科ですから、これまで西洋医学一辺倒でやってきました。そして今では、先天性の心臓病や狭心症などの後天性心臓病も99パーセントが手術で治ります。しかし中には、先端医療をもってしても治せないケースがあります。ところで、現在日本の三大死因のトップは癌です。2位が心臓病、3位が脳卒中です。心臓病と脳卒中は動脈硬化が原因の場合が多いのです。癌は早期であれば手術でとれれば治りますが、末期状態ではどうすることもできません。最後には藁にもすがる気持ちで何とか治してあげたいと思うのですが、抗癌剤などはガン細胞だけではなく、正常な細胞も殺してしまい、頭髪が抜けることもあり、食事ができなくなったりもするのです。病室で帽子をかぶっている人のほとんどは抗癌剤を投与されています。特に、女性はそれだけで落ち込んでしまいます。そういう姿を見ますと、やはりかわいそうに思うのです。先端医療だけでは、どうしてやることもできなくなってくるのです。西洋医学はもともと東洋医学からスタートしています。問診、脈を診るなどはその原点です。西洋医学というと、様々な技術を使いますが、最初の段階では東洋医学なわけです。西洋医学の最先端の部分と、東洋医学の原始的な部分をドッキングさせることができれば、心と体の癒しを実現できると思うのです。そして家の中で天寿を全うできるようにしてあげられると思うのです。最近の人は、ほとんどが病院で亡くなっています。本人はもちろん、家族も、本当は安心できる家で最後を迎えたいはずなのです。本当に困っている患者さんのために、何とかやれることがないかと、ずっと思ってきたのです。まだ、未知数の部分は沢山あるのですが、今回のこの学会が新しいきっかけになればと思っています。

藤田　私は足の専門から香りの専門へと、移行していきました。人間の老化はまず足から来ます。靴に違和感を覚えるだけで、仕事に集中できなくなりますからね。身につけるもののなかでは、靴がいちばん大事ですからね。

岡田　もちろん、老化は足から来ますが、靴の問題も大きいと思います。それから動脈硬化や静脈の血流など、血行が関係しています。血管の病気から来る歩行障害もありますから、そういうところは医学的に検査をして治すことになるのです。西洋医学をやっていて、東洋医学の話をききますと、はじめは半信半疑なことも多かったのです。しかし、交通事故で意識のない患者がいますと、救急医療しかないのですが、慢性の肝炎や腎炎、リウマチなど徐々に悪くなっていく病気には、ＪＡＣＴ（ジャパニーズ・アソシエーション・オルターネティブ・コンプリメンタリー・トラディショナルメディシン）で取り扱っている治療法が有効なことがあるのです。ＪＡＣＴとは、代替・相補・伝統医療連合会議の略称です。これからはじまる新しい分野で、西洋医学に変わるものを模索していこうという動きです。最終的には末期的な患者さんの救命や、苦痛を伴わない延命が目的です。今まで6回の大会は東京ばかりで開催されてきました。そこで関西でもやろうという話になり、今回もはじめは大阪でやることになりかけていたのですが、関西では、私の熱意と、実力がいちばん強かったようです。「それなら神戸の岡田のところでやろうか」という話になったのですよ（笑）。このような経緯を矢田神戸市長に話をしましたところ、それなら私も行かなければと、市長さんも来てくれることになったのですよ。

藤田　新聞に出ていたのですが、「これから伸びる商品はなに?」というアンケート調査によりますと、癒しのグッズや食品が1位だったのです。香りやフット

ケアなどのマッサージも含めた業界です。

岡田　私どもの調べでは、何らかの健康食品を利用している人が、最近は全体の7割に上ります。その中でも女性の数は圧倒的です。そして新聞などによる広告が多いものほど売れています。ところが我々から見ますと、害はあっても益のないものが沢山あるのですよ。ですから、今回のＪＡＣＴ大会でも、「健康食品は本当に効くのか」というプログラムがあるのですが、こういったことを医学的に知らしめていく必要があると思うのです。

藤田　私がフットから香りの商品に移っていったきっかけは、ストレス解除のために考えついた結果です。いい靴を履いて、よく歩き、脳を活性化させて、リラックスして健康の基本をつくる中で、もっとダイレクトに脳を活性化させるものは何かと考えたのです。もっとストレートに効果があるものがほしかったのです。人間の五感の中で、嗅覚だけが脳の真ん中に直結しているのです。いま子供がすぐにキレルという問題がありますが、それも脳の中間層（大脳辺縁系）に問題があるからなのです。その結果前頭葉との間をつなぐ神経がおかしくなってきているのです。その部分を何とかするためには、香りがいちばんダイレクトに作用するのです。音楽や映像、マッサージなどもいいのですが、嗅覚は脳に直接いきますから、非常に即効効果があるのですよ。ところがむずかしいところは、中間脳には好き嫌いを解釈する部分があるのです。例えば音楽などでは、クラシックが嫌いだったとしても、モーツァルトに効果があると言われれば、脳で「効果があるはずだ」と解釈しますから、一応聞く耳を持てるのです。ところが鼻だけはどれだけ効果ある香りだと言っても、それを吸った瞬間に嫌な匂いだと感じてしまうと、逆にストレスに感じてしまうのです。鼻だけは嘘をつけないのです。ですからアロマテラピーの世界では、ひとり一人の好みに応じた香りをつくっていくのが本来の姿です。ひとつのブレンドで、１００人中80人がリラックスできる香りをつくることはむずかしいのです。私は約8年半研究をつづけてきましたが、西洋のアロマテラピーに東洋の英知を導入して、いまの商品が完成したのです。大体8割以上の人がリラックスできる香りを開発しました。Ｊリーグやマラソンのトップ・スポーツ選手や経営者、主婦、受験生など、過度のストレスを抱えている人たちにテストをしてもらい、効果を実証してきたのです。香りの入ったオイルやジェルでマッサージをすることで、筋肉を和らげ、血行を良くすると同時に、香りの効果もあるのですよ。普通のオイルとはまったく違うマッサージの効果が得られます。イギリスやドイツ、アメリカなどでは病院の中にアロマテラピーのコーナーがあるのですよ。ところが、日本ではなかなか少ないですね。

岡田　私の知っている札幌の病院に行きますと、病院の待合室にはラベンダーやチューリップなど、季節の花がおいてあるのですが、それは診察を待つ間のイライラを抑えるためだと院長が言っていました。香りにはかなり気をつかっているところもあるようです。

昔の日本にも通じるチベットの現代医学

藤田　そもそも代替医療というのは、予防医学が主体となっていますよね。心や精神の問題です。西洋医学はどうしても見えるものを中心に考えます。しかし心のように見えない部分が、健康に大きな影響を与えているのも事実です。香り以外にも、音楽や鍼灸、マッサージにもそういう要素があると思うのです。

岡田　東洋医学については様々な本がありますが、資料を見ているだけでは一向に理解できません。そこで昨年の夏に、東洋医学の元祖と言われるチベットに行って来たのです。そこでチベット医学を実際に見てきました。実際に見て納得した部分がかなりあるのです。チベットではリウマチやアトピー性皮膚炎、慢性肝炎、慢性腎炎などの患者がいっぱいいて、向こうの人の平均寿命は60歳ぐらいなのです。チベットの病院では薬浴といって、病室に各患者にひとつずつ浴槽が用意されているのです。そしてその症状にあった薬湯を各患者毎に入れるのです。一日2回から3回、15分ほどお湯につかるのです。実際に、入院した直後のアトピー性皮膚炎の患者さんが、2週間後にはきれいに治っているのを見ました。酷く腫れ上がっていた皮膚が、きれいに治っていたのですよ。ほかにもリウマチで手が動かない人が1週間で治っていました。チベットの平均海抜は約3200メートルですが、多くの薬草が生えているのですよ。これは、日本の湯治とまったく同じことなのです。日本でもそういう風習は昔からあったのです。人里離れたところで、ゆったりと温泉に浸かっていますと、心も体もリラックスできますからね。まさにお湯のオーダーメイドなのです。これは日本の病院でも使えると思いましたね。

　しかし最近は、薬草が少なくなってきているようで、植林のように薬草を保護していました。チベット医学研究所には薬草の専門家が沢山いて、生えている草や花を見て、どの症状に効果があるかすぐにわかるのです。その方々に案内してもらい、私も山に登りましたが、70歳近い人が、崖などをすいすい登っていくのですよ。それはちょっと真似できませんでしたね（笑）。山にはヤクがたくさんいて、放牧民の小屋には、テントの傍に山積みの黒い固まりがあり、ヤクの糞を乾燥させてこれを燃料にしているのですよ。もちろんチベットにも西洋医学はあります。内視鏡を用いる胆石手術を見学させてもらいましたが、やっていることは日本とほぼ同じことです。しかし衛生面ではかなり問題がありました。でも、いろいろといい勉強になりましたね。やはり人の話だけでは駄目ですよ。実際に自分の目で見てわかることが沢山あるのです。

　インドにも行きましたが、そのときは水にあたって大変な目に遭いましたね（笑）。インドではペットボトルに入った水でさえ、生で呑むべきではないようですね。私が行ったのは南部の方なのですが、裸足で歩いている人が大勢いて、やはり衛生的には良くない環境でしたね。チベットとは違い、インドではヨガが多く取り入れられているのですよ。私も実習を受けてきましたが、あれは呼吸法だと思いました。インドでは

女性のヨガのインストラクターが沢山いるのです。それぞれの国の持ち味があって、面白いですね。

藤田　ヨガは脳の中枢神経にあるチャクラを活性化させるのですよね。インドにはオイルでマッサージしたり、食べ物の作用を利用するアーユルヴェーダーがありますね。岡田先生はご覧になられましたか？

岡田　私も少し見学してきましたが、食べ物とマッサージを関連づけることは、非常に大きな意味があると思います。私がチベットで見学させてもらったのは、アルラ・チベット医学研究所の付属病院だったのですが、そこにも西洋医学と東洋医学の両方があります。そこでカンファレンスを開き、意見の交換などもしたのですが、結局西洋医学というのは精密機械を使うところから先の医療なのです。最近の若い医者は、患者の体を触らずに、機械の検査だけで治療しようとする人がいます。それは数字を見ているだけで、患者を診ていることにはならないですよ。触ったり、聴診器をあてて自分の耳で聞いてみて、わからない部分を機械に頼るべきなのです。

　これからは西洋医学の人も、もっと東洋医学を知っていかなければなりません。我々は外科医といっても内科的なことを知っていなければなりませんし、逆も同じことです。チベットでは西洋医学と東洋医学の両方を行う病院を建てるそうです。来年の12月には完成予定とのことです。昔のチベット医学の医師は、お坊さんから医者になった人ばかりでした。今でもその制度は残っており、袈裟を掛けた医者の姿がたまに見られます。日本の医学はもともと漢方医がすべてやっていたのだそうです。それではいけないと明治政府が考え、日本の医学をドイツ医学に傾倒させていったのです。いまでも70歳以上の医師は、ドイツ語の教科書で医学を学んでいたはずです。戦後はほとんどアメリカがお手本になっていますね。私はハイデルベルグ大学に留学していましたが、ドイツやアメリカは裾野が広いのですよ。トップレベルはドイツやアメリカも日本も同じなのです。とくに、ドイツの場合は、土台が高いのです。ドイツでやっていることは絶対に間違いがないほどです。アメリカは、新しい挑戦はしますが、失敗もあるのです。日本がアメリカに傾倒していった背景には、やはり敗戦が大きいのですが、アメリカ人も日本人の優秀さをよく知っているのです。出来の悪いアメリカ人医師を使うより、日本の優秀な人を使いたがります。ですから、向こうの研究施設には日本人が沢山います。

医療産業都市構想とJACTの融合

岡田　3年ほど前に、日独合同の血管外科学会を神戸で開いたのです。みなさん神戸というといちばんに出てくるのが「神戸ビーフ」だったのですが、ほとんど誰も食べたことはないというのです。そこで食事に招待したのですが、「ドイツにもこんな美味しいビーフはない」と大絶賛でしたね。「帰りたくない」という人までいましたよ（笑）。最近では神戸というと、やはりみなさん震災のことが頭にあるようですね。

藤田　私は純粋の神戸っ子です。神戸で商品開発も行ってきましたし、その成果を世界の学会に報告してきました。今回、岡田先生が学会の大会長として神戸でJACT大会が開かれると云うことで、誠にご同慶の至りです。弊社も昨年「サーキュエッセンス」の香りでのストレス解消の効果について脳波や筋電計等のデータを発表しましたが、今年は血液の変化等、一層深くリラックスの状況や快適な睡眠のシステム等、研究発表する予定です。これまで香りに関して、医学的にここまで突っ込んだ学会発表をしたケースは少ないのです。香りにより血液がどう変化をするのか、ドーパミンの作用、香りによりアドレナリンの分泌をどうセーブできるのか、集中力を高める効果についても、医学的に証明できる形で実績を重ねています。いま現在も、

岡田先生にも協力していただいていますし、いろいろな大学や病院でテストを重ねています。

岡田　医療産業都市構想では、先端の研究ばかりが目に付きますが、今回のＪＡＣＴと医療産業都市構想がジョイントすれば、もっと強いものとなるはずです。最先端の遺伝子治療などは、そう簡単に臨床には持って来られません。それまでに東洋医学と西洋医学のドッキングした形を神戸でつくれば、日本だけではなく、世界中からの注目を集めるはずなのです。チベットなども提携して、学生や医者の行き来ができるようにもしていきたいですね。

藤田　私がやっている研究も、西洋と東洋の文化をドッキングさせたものです。これは21世紀の大きな方向付けになると思っています。神戸市にも西洋と東洋、癒しとリラクゼーションなどが複合した施設をつくれば、人の心と体バランスをとるための、非常に大きなプロジェクトになることでしょう。

岡田　そういう施設はぜひ実現させてほしいですね。

藤田　いい音楽、香り、風景などは人間の五感を心地よく刺激します。そういったことを医療に取り入れていきたいですね。

岡田　私は、手術室で音楽を流していました。しかし集中しているときには、まったく耳に入らなくなるのです。ほとんどがクラシック音楽を流しているのですが、患者さんの中には、麻酔前投薬で意識があまりはっきりしていないのに、いい音楽はちゃんと覚えている人がいますよ。音楽を聴いて手術室に安心して入れたと、後で言ってもらえて、その時は私も本当に嬉しかったですね。医療産業都市構想の中でも、遺伝子医療などの最先端医療に加えて、もうひとつ規模の大きなテーマがいると思うのですよ。地球規模で分かち合える医療を突き詰めていきたいですね。

『爽やかな人生を送るために！』
第７回JACT大会２００３神戸
日本代替・相補・伝統医療連合会議

＜特別講演＞　Ａ会場

「WHOの相補・代替・伝統医療（CAM）への取り組み」
川口　雄次（WHO健康開発総合研究センター所長）
「我が国における健康食品の今後の展開」
吉川　敏一（京都府立医科大学教授）
「霊性の時代へ－ホメオパシーの可能性」
帯津　良一（帯津三啓病院名誉院長）
「笑いはなぜ健康によいのか?遺伝学的考察」
村上　和雄（筑波大学名誉教授）
「癒しの芸術と科学」　奥　健夫（大阪大学助教授）
「相補代替医療の医療経済」　西村　周三（京都大学教授）
「万田酵素の基礎的研究」　奥田　拓道（熊本県立大学教授）
「天然の優れた抗酸化剤・制癌剤は如何にして開発されたか」
丹羽　靱負（土佐清水病院長）
「マイナスイオンの効果と臨床」　堀口　昇（堀口病院理事長）

Ｂ会場にて一般演題が発表されます。

＜一般市民公開講座開催＞　Ｃ会場

1）代替医療とは一体何か　服部かおる（三木市民病院　前内科医長）
2）肝臓病はなぜ怖い　金　守良（神戸朝日病院　院長）
3）あなたは心臓の突然死を防げるか
岡田　昌義（第７回JACT大会長）
4）健康食品は本当に効くのか　平井みどり（神戸薬科大学教授）
5）これで健康が維持できる ── 健康企業からの報告

ぜひともご出席いただきまして、日頃の疑問を明らかにして頂きたいと存じます。

一般市民公開講座開催
日時：12月20日(土) 午後２～５時
会費：2,000円（資料・ドリンク付き）

日　時：平成15年12月20日(土)・21日(日) 午前９時～
場　所：神戸国際会議場（TEL 078-302-5200）
神戸市中央区港島中町6-9-1
大会長：岡田　昌義（兵庫大学教授）

JACT兵庫支部事務局：〒658-0058 神戸市灘区御影町西平野一の坪11-1
TEL.078-843-5827　FAX.078-843-5600
JACT URL：http://jact-fff.or.jp